

## 序 論

まず、本論文の時代区分をはっきりさせておけば、これから取り上げようとしている戊戌変法期とは、変法がはっきり主張された康有為を中心とする公車上書からそれが否定された戊戌政変までを指している。

従来、中国の近代史を政治的に見た場合、小野川氏などにより、洋務から変法へ、変法から革命へというコースが考えられて来た。<sup>①</sup>

しかし、このような考え方に対して、1983年、溝口雄三氏は、中国近代史研究における「偏向」や「歪曲」が洋務運動や洋務派の研究において顕著であることを示した論文を書き、<sup>②</sup>それに続く研究をまとめられた。<sup>③</sup>すなわち、同氏は、中国近代を「中国の基体」の「洋務によるヨーロッパの受容」過程としてとらえ、近代史は、洋務運動の過程であり、その中の政治的分野として、変法、革命が位置づけられるという見方をしている。

この溝口氏に対して、久保田文次氏は、洋務運動は「政治制度・国家体制全般にわたって総改革」をすることはできなかったとして、従来の近代化の尺度としての資本主義化の有効性、つまりは、「洋務派が課題を解決しなかったので、康有為や孫文は当面の問題である独立を回復するために、改革や革命をめざした」としており、<sup>④</sup>現在も、両氏の論争は続いている。<sup>⑤</sup>

また、大谷敏夫氏は、溝口氏の考え方を批判的に摂取しておられ、「清朝政治思想史を通史として把握する視点が必要である」<sup>⑥</sup>とされている。すなわち、洋務運動を清朝史に位置づけ、評価して行うという考え方である。

さらに、鈴木智夫氏は、溝口氏の洋務派の民衆運動に対する姿勢と工業化政策、外交政策に対する所説に理解を示し、「客観的に史実を見なおし、そのもっとも本質的な部分をとらえていくことが必要となろう」といわれる。<sup>⑦</sup>

本論文は、以上の考え方を踏まえつつ、直接的には政治的に見て、変法運動史を追求し、究極的には中国の近代史を明らかにして行くことを究極の目的としている。すなわち、中国の近代化において、変法運動は必然的な道筋であったと考える。

筆者としては、近代史を明らかにして行く以上、久保田氏が言われるように、「資本主義発展を基軸とする中国近代史の把握の方法は、なお有効であり、必要であると考えている」<sup>⑧</sup>といわれることは賛成である。

ただ、中国近代は、溝口氏が言われるように、「単なる歴史的な事実の世界」<sup>⑨</sup>として客観的に、相対化して実事求是で把握して行く必要があると考える。その点では、大谷、鈴木氏の所説にも賛成する。

本論文の執筆の中でも、上海の女学堂の設立に当って、洋務派と変法派とが共同していることが明らかになった。しかし、中国の近代史は「洋務によるヨーロッパの受容」だけではなく、その内在的

な歴史の発展から考えれば、具体的な洋務運動から、変法、革命運動への展開の過程として把握できるのではないか。また、たとえ、従来の政治史に見た、洋務、変法、革命という流れが、政治的な側面として、洋務運動の中に含まれようとも、変法運動を明らかにして行くことが、中国の近代化の実態を明らかにして行くことにほかならないと考える。すなわち、中国史の流れにおいて、近代化とは避けて通れない道であった。

さて、変法とは、政治制度の改革であり、戊戌変法の場合は、光緒帝を中心とする立憲君主制を意図したものであり、それは、戊戌の年の旧暦4月23日に開始され、旧暦8月初6日、西太后の訓政開始により終結したものである。その意義は、清朝の伝統的な専制君主制を立憲君主制に切り替えようとした所にあると考えられる。

そこで、本論文では、変法運動の基礎となり、それを押し進めて行くことになる、変法時期に設立された、学会、報刊、学堂の実態と機能を明らかにし、戊戌変法の解明と中国近代史の解明に役立てたいと考えている。

すなわち、康有為は、上奏によって、光緒帝に直接、意見を述べ、変法運動を展開しようとしたが、上層官僚にはばまれたため、方向を多角化し、学会、報刊、学堂の設立運動を通し、周囲の人々の注意を喚起し、与論を盛り上げて変法運動を進めようとした。

ここで言われている学会、報刊、学堂は、当時としては、いずれも、政治的な性格を帯びていたが、それらを明らかにしておく。学会というのは、欧米の一般の学会に通じるものであり、その先駆となるものは、中国の書院であり、当時来華していた宣教師達の広学会であった。

報刊は、いわゆる新聞社や学会の機関紙であり、その先駆をなすものは、中国の古来よりの官報であり、広学会の機関紙『万国公報』であった。学堂とは、清末の洋式学校であり、その先駆をなすものは、中国の伝統的な学校や書院であり、洋務期からの洋式学校であった。

さて、この学会、報刊、学堂は、士大夫層、朝廷に影響を与え、文人社会の変革と朝廷の改革をうながすことになっていた。それは、社会的にも政治的にも意味があった。

この運動は、北京、江蘇省、湖南省を中心として、各省に影響を与え、光緒帝の変法国是をうながし、変法体制を下支えするものとなった。

ついで、従来の研究史と本研究との関係を明らかにして行きたいと思う。考察の順序として、最初に学会、ついで報刊、最後に学堂について述べて行く。

学会については、著書としては、湯志鈞氏の『戊戌変法論叢』<sup>⑩</sup>『康有為と戊戌変法史』<sup>⑪</sup>があり、『戊戌変法史』<sup>⑫</sup>では、前二著を発展させ、第三章において、学会の事などを述べておられる。それによれば、まず、北京強学会、上海強学会、南学会を述べ、そのあとで、各省の学会について触れておられる。さらに最近『戊戌時期的学会と報刊』<sup>⑬</sup>を出版され、その中で前述の学会を含め、51の学会が取り上げられている。

また、小野川秀美氏はその著『清末政治思想』<sup>⑭</sup>で、学会を18余り、取り上げておられる。その中

には、強学会、南学会、保国会務農会などが含まれている。王樹槐氏はその著『外人与戊戌变法』<sup>⑮</sup>で天足会、知恥学会、南学会、強学会、強学分会、聖学会などを取り上げておられる。

ついで、王爾敏氏は、『晚清政治思想史論』<sup>⑯</sup>で、南学会のことや、清季学会彙表を明らかにされている。張玉法氏は、『清季的立憲団体』<sup>⑰</sup>で、強学会、保国会、南学会など63の学会について述べておられる。

林能士氏は、『清季湖南的新政運動（1895～98）』<sup>⑱</sup>で、南学会などを取り上げておられる。小野和子氏は『中国女性史』<sup>⑲</sup>で不纏足会について述べておられる。

呉廷嘉氏は、その著『戊戌思潮縦横論』<sup>⑳</sup>の第九章「戊戌思想時期的知識分子隊伍」で、学会としては、粵学会、蜀学会、閩学会、聖学会、蒙学会などを取り上げておられる。王拭氏その遺著『維新運動』<sup>㉑</sup>で、北京強学会、上海強学会、農学会、不纏足会、南学会など26学会を取り上げておられる。

論文としては、菊池貴晴氏の「清末における学会の意義について—政治結社としての南学会」、<sup>㉒</sup>転農氏の「記強学会」、<sup>㉓</sup>内藤戊申氏の「強学会記事—汪康年伝稿之2—」、<sup>㉔</sup>王拭氏の「強学会的人物及其派別」、<sup>㉕</sup>康同璧女史の「清末の〈不纏足会〉」、<sup>㉖</sup>があり、小野和子氏の「清末の婦人解放思想」<sup>㉗</sup>では、不纏足会、女学会が取り上げられ、三石善吉氏の「派閥と政党」<sup>㉘</sup>では、保国会が取り上げられている。

以上、学会について、従来の研究を見て来たが、本論文との関係で言えば、湯志鈞氏、小野川氏、王爾敏氏、張玉法氏、王拭氏、呉廷嘉氏が学会を網羅的に取り上げられるので、湯志鈞、小野川氏の所説を中心に参考にしながら、諸学会の研究を広め、深めて行きたい。また、三石氏の場合保国会について述べているが新しい見方が見られるので、それを参考にして行きたいと考えている。

報刊についての研究は、その直接的な研究としては、戈公振『中国報学史』<sup>㉙</sup>があり、これは、中国の全時代を通しての報の研究であり、変法時期についてもかなり精しい。また、報刊について触れた研究には、前述の湯志鈞氏の、『戊戌变法史論叢』、『戊戌变法史』、『戊戌時期的学会和報刊』があり、変法期の報刊について、『万国公報』、『強学報』、『中外紀聞』、『時務報』、『湘学報』、『湘報』、『知新報』、『国聞報』など、36の報刊が取り上げられている。

小野川秀美氏も前述の『清末政治思想史研究』で、7つ余りの報刊を取り上げておられる。その中には、『時務報』、『湘学報』、『湘報』、『農学報』、『強学報』、『国聞報』などが含まれている。

王拭氏も前述の『維新運動』で『時務報』『農学報』『格致新報』『湘学報』『湘報』など39の報刊を取り上げておられる。

史料としては、張静廬輯註『中国近代出版史料』<sup>㉚</sup>がある。

王樹槐氏は、前掲書で『中外公報』、『国聞報』、『循環日報』、『湘学報』、『湘報』について触れている。林能士氏は前掲書で『湘学報』、『湘報』を取り上げておられる。梁元生氏は、1978年、『林楽知在華事業与《万国公報》』<sup>㉛</sup>を書き、林楽知の中国における宣教師、教育家、新聞事業、広学会の活動と《万国公報》の発行について述べておられる。

また、頼光臨氏も『中国近代報人と報業』上・下<sup>32</sup>を出版され、まず、宣教師の報業を『万国公報』を中心として述べられ、ついで、王韜、梁啓超、汪康年の報業にも触れ、さらに、清末革命の報、官報から五四時期以後の報についても述べておられる。1981年には、方漢奇氏が『中国近代報刊史』<sup>33</sup>を出版され、清末民国初期の報刊について、精しく述べておられる。

1985年には、張召奎氏が『中国出版史概要』<sup>34</sup>を出版され、その中に変法派の『時務報』などが描かれている。1988年には、王風超氏が、『中国的報刊』<sup>35</sup>を編著され、出版しておられる。その内容としては、中国の報紙の源流、近代報刊、現代の報刊、その発展、台湾、香港、澳門の新聞について述べられている。1991年には、桑兵氏が『晚清学堂学生与社会变迁』<sup>36</sup>を書かれ、その中で、『時務報』、『湘学新報』、『利济学堂報』、『集成報』、『知新報』を取り上げておられる。

1993年には、秦紹徳氏が『上海近代史報刊史論』<sup>37</sup>を書かれ、その中で、『時務報』、『農学报』、『蒙学报』、『工商学报』、『算学报』、『新学报』、『集成報』、『萃報』、『循環日報』、『湘報』などを取り上げておられる。1894年には、熊月之氏が『西学東漸和晚清社会』<sup>38</sup>を出版され、その中で『格致新報』を取り上げておられる。

また、史料としては、1991年、中華書局から『強学报』、『時務報』、『昌言報』、『實学报』、『集成報』、『清議報』などが出版されている。<sup>39</sup>

以上、報刊について述べたが、古くは、戈公振氏が丹念に各報刊を採集しておられ、湯志鈞氏も各報刊を網羅しておられる。それについて、頼光臨、方漢奇、張召奎、王風超氏、秦紹徳氏も可成り良く採集しておられる。

本論文では、主に戈公振、湯志鈞氏の所説を参考にしながら、更に、研究を広め、深めようと努力した。

学堂に関する専著としては、莊吉発氏の『京師大学堂』<sup>40</sup>や蕭超然氏などの『北京大学校史—1898—1949—』<sup>41</sup>などがある。また、学堂について触れた著書の主なものには以下のものがある。まず、陳東原氏はその著『中国教育史』<sup>42</sup>で、京師大学堂・時務学堂などを取り上げておられる。ついで多賀秋五郎氏の『中国教育史』、<sup>43</sup>小野川氏の前掲書がある。小野川氏は同書で、算学館、時務学堂、大同学校、南洋公学、京師大学堂を取り上げておられる。王樹槐氏も前掲書で、日本横浜大同学校、中西学堂、京師大学堂、南洋公学、時務学堂、算学館を取り上げておられる。

多賀秋五郎編『アジア近世教育史』<sup>44</sup>も学堂を取り上げておられる。陳啓夫氏は『近代中国教育史』<sup>45</sup>で時務学堂、課吏館を取り上げておられる。林能士氏は前掲書で、時務学堂、課吏館を取り上げておられる。斉藤秋男氏著の『中国現代教育史—中国革命の教育構造』<sup>46</sup>と世界教育研究会編『中国教育史、世界教育大系4』<sup>47</sup>では、京師大学堂が取り上げられている。

小野和子氏は、前掲書で、女学堂を取り上げておられる。桑兵氏は前掲書で、『湖南時務学堂』、『湖北自強学堂』などを取り上げておられる。王忭氏は前掲書で、通芸学堂、女学堂、東文学社、時務学堂など18の学堂を取り上げておられる。



史料としては、舒新城編『近代中国教育資料』上中下)、<sup>48</sup>多賀秋五郎編『近代中国教育資料(清末編)』<sup>49</sup>がある。

また、論文としては、褚季能氏の「第一次自弁女学堂」<sup>50</sup>や小野和子氏の前掲論文、関斗基氏の『19世紀末中国の改革運動と上海の商人子弟』<sup>51</sup>などがあり、女学堂が取り上げられている。

また、小林善文氏は、「北京大学と軍閥—蔡元培の改革とそれをめぐる闘争—」<sup>52</sup>で京師大学堂の歴史に触れている。

以上、学堂について述べて来たが、変法期の学堂については、小野川氏、王樹槐氏、王栻氏が多く触れられ、教育史的には、陳東原氏、多賀秋五郎氏、陳啓夫氏などが、系統的に述べておられるので、本論文では、小野川氏、王樹槐氏、王栻氏の所説を主に参考にしながら、更に研究を深め、広めようと意図した。

最後に、本論文の構成について明らかにしておく。

第一章においては、変法期における学会、報刊、学堂の概要と題して、変法期に設立された、学会、報刊、学堂について概観して行く。第一節では学会、報刊、学堂の概要を述べる。

第二節は学会であるが、まず学会の先駆となるものを明らかにし、ついで、学会の機能と性格について述べる。さらに、学会参加者の階層構成を明らかにし、学会の年代的・地理的分布を述べ、変法運動との関係も明らかにして行く。

第三節は報刊であり、まず、報刊の先駆となるものを明らかにし、ついで、報刊の機能と性格を考察する。さらに、報刊参加者の階層構成を明らかにし、その年代的・地理的分布についても述べる。最後に、変法運動における報刊の意義についても明らかにして行く。

第四節は学堂であり、まず、学堂の先駆となるものについて述べ、ついで、学堂の機能を明らかにし、学堂参加者の階層構成についても考察する。さらに、学堂の年代的・地理的分布を述べ、変法運動における学堂の意義を考察して行きたい。

ついで、第二章から、第四章までは、それぞれ、第二章、教育、学問を中心とする組織、第三章、啓蒙的な役割を果たした組織、第四章、時事的政治的組織と題したが、その意味を略述して置く。

変法期の学会、報刊、学堂は、すぐれて政治革新的な機関であったが、その中でも、「西学を受容して、教育、学問的傾向の強いもの」、「人権や社会の啓蒙的な傾向の強いもの」、「当時の時事問題や政治にかかわる時事的政治的傾向の強いもの」に分けることができると思われる。そして、これらの組織がそれぞれ関連性を持って、有機的に結合して行ったことについては、後述して行く。

第二章では、教育、学問的組織について考察して行く。第一節では概観をし、第二節では、西学を受容について述べて行く。

事例研究として、第一項では、務農会について考察する。まず、務農会の設置の意図と目的について述べ、ついで、務農会の機能と参加者を考察し、最後にその意義について述べる。

第二項では、『農学报』について述べる。まず、『農学报』の発行の意図と組織内容について考察し、

参加者についても述べ、最後にその意義を述べて行く。

第三項では、『格致新報』を取り上げる。まず、『格致新報』の発行の経緯を明らかにし、ついで、その組織と機能、内容と参加者について考察し、最後に、その意義を述べて行く。

第四項では、時務学堂を取り上げる。まず時務学堂の設置の意図、機能を明らかにし、参加者を分析し、最後に時務学堂の意義を考察する。

第五項では、京師大学堂を取り上げる。ついでその機能、組織を考察し、最後にその後の発展についても明らかにしたい。

第三節では、女子教育の事例として、中国女学堂を取り上げる。まず、設置の意図、機能を明らかにし、ついで、参加者を述べ、最後にその意義を明らかにする。

第四節では、児童教育と教育学の組織として、蒙学会と『蒙学报』を取り上げる。第一項として蒙学会から述べて行く。同会の設置の意図、機能について明らかにし、ついで参加について考察し、最後にその意義について述べて行く。

第二項として、『蒙学报』を取り上げる。まず発行の経緯を明らかにし、ついで、組織、内容、参加者について述べ、最後に同報の意義について述べる。

第五節として実学的な組織として、浙江杭州蚕学館を取り上げる。まず、同館設立の意図、ついで、機能、参加者を明らかにし、最後にその意義について明らかにして行く。

第六節として中学的な組織である聖学会を取り上げ、その意図、組織、参加者、意義を明らかにして行く。

第三章では、啓蒙的組織を取り上げる。第一節では、同組織の概観を行い、第二節では、社会生活における啓蒙的組織の事例として戒鴉片煙会の場合を取り上げる。

まず、同会の設置の意図、ついで機能、参加者について明らかにし、最後に意義についても述べて行く。

第三節では、女性に対する啓蒙的組織として、不纏足会を取り上げる。まず、同会の先駆としての天足会について述べ、ついで、同会設置の意図、機能、参加者を明らかにし、最後にその意義について述べておく。

第四章では、時事的・政治的組織について述べる。第一節では、同組織の概観を行う。第二節では、時事的・政治的組織の事例研究として、北京強学会、上海強学会、『強学报』南学会、『時務報』、『湘報』、『国聞報』、課吏館を取り上げる。

第一項では、北京強学会を取り上げる。まず設置の意図と機能を明らかにし、ついで参加者について述べ、最後に同学会の官書局への移行について考察する。

第二項では、上海強学会を取り上げる。まず、設置の意図について述べ、ついで、機能参加者について明らかにし、さらに上海強学会の時務報への改変、最後に上海強学会と北京強学会との異同について明らかにして行く。

第三項では『強学報』を取り上げる。まず、その発行について述べ、ついで組織、内容、参加者について明らかにし、最後にその意義について見て行く。

第四項では、南学会を取り上げる。まず、変法運動と湖南省の関係について述べ、ついで、南学会の設置、その機能、参加者を明らかにし、最後にその意義について考察する。

第五項では、『時務報』を取り上げる。まず、その創刊の経緯を明らかにし、ついで、その機能、内容、参加者、意義について述べ、最後に時務報の昌言報への移行について明らかにする。

第六項では、『湘報』を取り上げる。まず、その発行の意図を明らかにし、ついで、機能と組織、内容、参加者について述べ、最後にその意義を明らかにする。

第七項では、湖南課吏館について取り上げる。まず、湖南課吏館の設置の意図を明らかにし、ついで、機能、参加者について述べ、最後にその意義を考察する。

第八項では、『国聞報』を取り上げる。まず、『国聞報』の発行、組織と内容について考察し、ついで参加者、意義について述べて行く。

第三節では、外国侵略に反対する政治組織として、保国会を取り上げる。まず、保国会の設立、ついで、その機能、参加者、最後に保国会の禁止とその意義を明らかにして行く。

第五章では、変法期における学会、報刊、学堂の経済的背景について述べる。第一節では、それを概観し、第二節では、事例研究として湖南省を取り上げ、湖南省の経済論について述べ、第三節では、湖南省における経済活動の展開を明らかにして行く。

第六章では、変法期における学会、報刊、学堂の意義と題して述べて行く。まず、第一節では概観し、第二節では、年代的・地理的拡大について述べ、第三節では、変法運動への接続について明らかにして行く。

以上が、本論文のあらましであるが、以下各章において展開して行く。